

内田百閒

冥途

旅順入城式

笹川良一記念文庫

刊行のことば

書物は人間の最大の喜びで
 は読んだ書物は、人間の
 心の天性となり、人格
 現代のための出版社と
 旺文社文庫を刊行する。
 今の古今をつらぬき、文
 学般におよび、いやしく
 心の教養の基盤として、
 心を可及的に多く刊行せ
 るだけ楽しく、消化し
 は出版社の義務である。
 いるわが社は、この目的
 へ。あえてわが社の志を

〔編集顧問〕 小田切進 茅 誠司 竹内 均
 外山滋比古 林健太郎 森戸辰男 (五十音順)

旺文社文庫 冥途・旅順入城式

定価はカバーに表示してあります

1981年5月20日 初版発行 (乱丁・落丁本はお取りかえします)
 1982年 重版発行 (ので本社に直接お申し出ください)

著者 内田百閒

発行人 赤尾好夫

編集人 雨宮良夫

印刷所 新興印刷製本株式会社／合資会社 中村印刷所

製本所 有限会社 穴口製本所

発行所 株式会社 旺文社
 162 東京都新宿区横寺町

電話 (編集)03-266-6372
 (販売)03-266-6415

0193612-980724

204108

©内田こい 1981

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

Printed in Japan

旺文社文庫

冥途・旅順入城式

内田百閒著

旺文社

冥途

目次

短夜	支那人	柳藻	道連	蜥蜴	流木	木靈	件	烏	盡頭子	山東京傳	花火

七	三	五	五	五	四	六	九	三	六	四	九
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

石 疊

疱瘡神

白 子

波止場

豹

冥 途

旅順入城式

「旅順入城式」序

昇 天

山高帽子

遊就館

影

映 像

猫

七

八

九

十

十一

十二

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

狹筵

*

旅順入城式

大宴会

大尉殺し

遣唐使

菊

鯉

五位鷺

銀杏

女出入

矮人

流渦

坂

水鳥

二一九

二二九

二三三

二三八

二四一

二四六

二五三

二五六

二五九

二六二

二六五

二六九

二七三

二七七

雪

二八三

波頭

二八五

残照

二八七

先行者

二九一

春心

二九七

秋陽炎

三〇一

蘭陵王入陣曲

三〇四

木蓮

三〇六

藤の花

三一

解説

高橋英夫

三二五

「冥途」「旅順入城式」雑記

平山三郎

三三七

〔編集部註記〕 著者の遺志により、かなづかいは原文のままとした。漢字は正字体を新字体・略字体にあらためた。ただし、人名・地名をはじめ、漢字の一部を正字体とした。

冥

途

花 火

私は長い土手を傳つて牛窓の港の方へ行つた。土手の片側は広い海で、片側は浅い入江である。入江の方から脊の高い蘆^{あし}がひよろひよろ生えてゐて、土手の上までのぞいて居る。向うへ行く程蘆が高くなつて、目のとどく見果ての方は、蘆で土手が埋まつて居る。

片方の海の側には、話にきいた事もない大きな波が打つてゐて、崩れる時の地響きが、土手を底から震はしてゐる。けれども、そんなに大きな波が、少しも土手の上迄上がつて来ない。私は波と蘆との間を歩いて行つた。

暫^{しばらく}らく行くと土手の向うから、紫の袴^{はかま}をはいた顔色の悪い女が一人近づいて来た。さうして丁寧に私に向いて御辞儀をした。私は見たことのある様な顔だと思ふけれども思ひ出せない。私も黙つて御辞儀をした。するとその女が、しとやかな調子で、御一緒にまゐりませうと云つて、私と並^{なら}んで歩き出した。女が今迄歩いて来た方へ戻つて行くのだから、私は恠^{あや}しく思つた。丁度私を迎^{むか}へに来た様なふうにものを云ひ、振舞ふ。しかし兎^とも角^{かく}もついて行つた。女は私よりも二つか三つ年上

らしい。

すると入江の蘆の生えてゐる上に、大きな花火が幾つも幾つも揚がつた。綺麗な色の火の玉が長い光りの尾を引いて、入江の水に落ちて行つた。女がその方を指しながら、

「あの辺りはもう日が暮れてゐるので御座います。早く参りませう。土手の上で夜になると困りますから」と云つた。

私はこんな入江に花火の揚がるのが、何だか昔の景色に似てゐる様に思はれた。

段段行く内に蘆の脊が次第に高くなつて来て、私の頭の上に小さな葉の擦れ合ふ音がするやうになつた。すると辺りが何となく薄暗くなつて来て、土手が夜に這入りかけたらしく思はれた。さうして海の上の空が、鮮やかな紅色に焼けて来た。暗くなりかけた浪がしらに薄い紅をさして不思議な色に映えて来た。私はそれを見て、それから女を顧みた。女は沖の方を指しながら、

「沖の方も、もう日が暮れてゐるので御座います。早くまゐりませう」と云つた。

おきに、真赤に焼けてゐた空の色が何処となく褪せかかつて来た。入江の向うの遠くの方から、紙の焼けた灰の様なものが頻りに海の上の赤い空へ飛んだ。

「あれは海の蝙蝠で御座います。もうここも日が暮れるので御座います」と女が云つた。

土手の上が暗くなつて来た。私は心細くなつた。浪の響や蘆の葉の音が私を取り巻いてしまつた。女の淋しさうな姿文が、はつきりと私の眼に映つてゐる。私はこの陰気な女と一緒に、行つて、碌な事はない様な気が出した。けれども一筋道の土手の上で、道連れを断るわけには行かないから、黙つて歩いて行つた。すると道の片側がぼうと明かるくなつて来た。驚いてその方を振り向い

て見たら、蘆の原の彼方此方に炎の筒が立つてゐて、美しい火の子がその筒の中から暗い所へ流れて出ては跡方もなく消えてゐる。その辺りの空には矢張り火花がともつたり消えたりしてゐた。花火の火の玉が蘆の中に落ちたんだらうと、その景色に見惚れながら私は思つた。

「左様で御座います。今にここいら一面に焼けて参りますから、早くまゐりませう」と女が云つた。

土手の妙な所から、女が入江の側に下りて行つた。私もその後をついて下りた。もう向うには、牛窓の港の灯がちらちら光つてゐるのに、女と離れられない。私はその灯を見ながら、女について行つたら、浅い砂川のほとりに出た。女がそのほとりを足早に傳つて行つた。暫らく行くうちに、砂川はちき消えてしまつて、長い廊下の入口に出た。女がそこへ私を案内して這入つた。私はもう行くまいと思ひ出した。さう思つて女の方を見ると、女は涙をためた目でちつと私の方を見ながら黙つてゐる。私は引き込まれる様な氣持がして、女について行つた。

廊下を歩いて行くと、段段狭く暗くなつて、足もとわからなくなつた。何処かで廊下の曲がつた時、向うの端にぼんやりしたカンテラの柱にともつて居るのが見えた。その光りが廊下の板にうつるんだ様に流れてゐた。女と私が次第に押しつけられる様になつて来た。私は段段息苦しくなつて、もう帰り度いと思つた。女が私をこんな所へ連れて来たわけが、次第に解つて来た様に思はれ出した。私は早く土手の上で別かれればよかつたと思つた。すると左側に広い白ら白らした座敷のある前に来た。まだ日が暮れては居なかつたと思つて、私はほつとした。その次にもまたも一つ座敷があつた。その座敷の本当の真中に、見台がきちんと据ゑてあつて、その上に古びた紙の帳面が

一冊拵げてあつた。私が何の気もなくその方を見てゐると、女が、それを讀んでくれれば何もかもわかると云ふ様な風に見えた。私はあわてて、目を外らしてその前を行き過ぎた。何だか非常に怖いものに触れかけた様な氣持がして心が落ちつかない。向うに縁があつて、手水鉢の上に、手拭がひらひら舞つてゐる。私はその手拭掛の下まで来て、ぼんやり起つてゐた。もう帰らうと思つた。すると女が私の前に跪いて、しくしく泣きながら私の顔を見た。

「もう土手は日がくれて真暗で御座います。どうかもう少し私の傍に居て下さいませ」と女が云つた。私は黙つて、帰る事を考へながら起つてゐた。何処かでさあさあと云ふ風の渡る様な音が頻りに聞こえた。

「蘆の原に火がついて、もう外へは出られません。あれは蘆の茎が何千も何萬も一度に焼け割れてゐる音で御座います」と女がまた云つた。けれども私は帰らうと思つた。こんな女の傍にゐるのは恐ろしい。

すると女がまた云つた。「土手は浪にさらはれてしまひました。もう御帰りになる道は御座いません」

さう云つてしまふと、俄に大きな声を出して泣き始めた。さうして、顔を縁にすりつける様にうつ伏せになつて、肩の辺りを慄はせた。女の上で、手拭掛の手拭がひらひらしてゐる。私はその間に帰らうと思つて、そこからもとの廊下に引返しかけた。その時に、私はふと縁にうつ伏せになつてゐる女の白い襟足を見入つてゐた。女は顔も様子も陰気で色艶が悪いのに、襟足文は水水してゐて云ひやうもなく美しい。私は、不意に足が竦んで、水を浴びた様な氣持がした。私はこの襟足を

見た事があつた。十年昔だか二十年昔だかわからない、どこかの辻でこの女に行き会ひ、振り返つてこの白い襟足を見た事があつた。ああ、あの女だつたと私が思ひ出す途端に、女がいきなり追つかけて来て、私のうなじに獅^し噛^がみついた。

「浮気者浮気者浮気者」と云つた。

私は足が萎^なえて逃げられない。身を悶^もえながら、顔を振り向けて後を見ると、最早^{もはや}女もだれもゐなかつた。それに、目に見えないものが私のうなじを攔^{つか}み締めてゐて、私は身動きも出来ない、助けを呼ばうと思つても、咽^{のど}喉^どがつかへて声も出なかつた。

山東京傳

私は山東京傳の書生に這入った。役目は玄関番である。私は、世の中に、妻子も、親も、兄弟もなく、一人ぼつちでゐた様である。私は山東京傳だけを頼りにし、又崇拜して書生になつた。

私は玄関の障子の陰に机を置いて、その前に坐つてゐた。別に私の部屋は與へてくれない。けれども、私は不平に思ふ様な事はなかつた。兎も角も、かうして山東京傳の傍に居られるのが、うれしいと思つた。

私は、その机の上で、丸薬を揉んだ。一度に、五つも六つも机の上に置いて、手の平でころがして居る内に、箸の様な薬の棒を切つたままの、角のある片れが、ころころと丸薬になつた。私は、一生懸命に揉んで、机のまはりに、ざらざらする程、丸薬をためた。その間に、いろいろの人が、玄関を訪れて来た様だけれども、みんな、はつきり覚えられない。

そのうちに、御飯の時が来た。御飯を食ふところは、何でも非常に奥の方の、白けた様な座敷であつた。私がそこへ這入つて行くと、山東京傳は、もう、ちゃんと、上座に坐つて、食事をしてゐた。私は、闕の上に手をついて、丁寧（ていねい）に御辞儀をした。暫らくして頭を上げて見ると、山東京傳は、知らん顔をして、枕の中に箸をつけて居た。それで私は猶（なほ）の事、山東京傳を尊敬し度くなつ

た。

私は、白けた座敷の中に這入つて、私の膳についた。辺りに、自分の影が散る様な心持がして、気になつて仕方がない。それに、広い座敷の中に、私と山東京傳の外、誰もゐない。私は、気が詰まる様で、黙つて居られなくなつた。又黙つてゐては悪からうと云ふ心配もあつた。けれども、つまらぬ事や、氣に触る様な事をみだりに云つて、怒られても困ると思つた。私は、頻りにもちもちして居た。山東京傳は知らん顔をして汁を吸うてゐた。私はいよいよ、山東京傳を畏敬する心が募つた。

傳 私は早く飯が食ひ度くて堪らない。けれども、山東京傳は、食へとも何とも云つてくれない。食へとか、何とか云ふのが、厭なのかも知れない。さうだと、無暗に遠慮してゐるのは、却つて悪いかも知れないから、食はうかと思つた。けれども、さうでないのかも解らない、今丁度食へと云はうとして居るところかも知れない、すると私が無遠慮に箸をつけるのも、亦よくない。私はどうしようかと思つて、膳の前に置いて、もちもち迷つて居た。

山 其の時、玄関へ、だれか来た様な気がした。私は、直ぐに玄関へ行き、途途ほうと溜め息をついた。玄関には何人も居ない。だれか来て歸つた後の様な気がする。その為に、あたりが非常に淋しくて、そこに起つてゐられない。私はすぐに奥の座敷へ戻つた。さうして、山東京傳の顔を見た。山東京傳は大きな顔で、髯も何もない。睫がみんな抜けてしまつて、眶の赤くなつた目茶茶である。私は、その顔を見て、俄に心の底が暖かくなつた。

「誰もまゐつたではありません」と私が云つた。